

図書館と水損

ー資料・図書館にとって水は大敵ー

日本図書館協会 図書館災害対策委員会

図書館施設委員会 委員

川島 宏

水が危ない

大雨による図書館の浸水被害は、たびたび繰り返され、図書館が受けるダメージは大きい。一帯の水位が増すと浸水を防ぐことは難しく、土嚢を越すような勢いを防ぐことは不可能に近い。水のリスクは洪水だけでなく、雨漏り、配管の漏水、地震の二次被害（設備破損等）、津波、火災の消火活動等注意すべきことは多い。

このように水によるダメージに対し警鐘があるのだが、この夏の洪水は、範囲・水量・被災者数ともに記録的で、1階全部が水没する図書館の被害は、想像を絶するものであった。

洪水・津波・火災

今世紀の自然災害を振り返っても図書館の水の被害は多い。その主なものをあげる。

- ・2003年 飯塚水害（北九州）
- ・2004年 福井県・新潟県の水害
- ・2005年秋の台風で東京西部の図書館が被害
- ・2011年 東日本大震災の津波・二次被害
- ・2012年 熊本の水害
- ・2015年 常総市・小山市の洪水被害
- ・2016年 熊本地震の二次被害
- 同年 長崎県諫早市の被害（落雷・消火水損）
- ・2018年 西日本豪雨

あなたの館は安全か

浸水ハザードマップのチェックは必須である。また標高も調べておきたい。過去の災害の記録を調べることも大事だ。倉敷市真備地区は、浸水危険度が高いとされていたのだが、警告が現実となった。

建物を新設・建て替えする時で、敷地選定の段階なら安全な地を求める。それが無理で不安があるなら、地下室を設けない、床を高くする、変電設備を上にあげるなど、安全策を取ることが求められる。河川・水路・池が側にある場合にはより慎重な施設づくりが求められる。

災害に備える

館のリスクを知った上で、防災計画を再チェッ

クすることが望ましい。自然災害は頻度が増し大型化している。

既存施設を使っているが、水損への備えを強化したい、と考える図書館職員は多いだろう。簡便には土嚢の準備が考えられるが、止水板や止水扉などを後から設置することは一般には難しい。

そのため、減災つまり被害の程度を極力低くするよう努力し備えることが現実的といえる。次ページの資料は地震被害にウェイトを置いたフローであるが、水害への備えにも応用できる。

普段の備え・訓練がしっかりしていれば、いざ災害が発生した（発生の恐れがある）場合の行動が迅速・適切になると期待される。

大切なものは何か

一番大切なものは人の命である。開館中の危機的状況なら利用者を守ることが最優先されるべきであろう。そのためには、まず自分が無事でなければならぬ。津波で亡くなった図書館員がいたことを心にとどめ、命を守る行動を取るよう正しい情報を得て、慎重に判断することが必要だ。

資料保存の視点からは、郷土資料や特別コレクションのように、貴重で替えのない資料をチェックし、水損・カビ・火災・紫外線から守るよう注意する。地下より1階、1階より2階が水に対しては安全といえる。また、手洗い・冷暖房ラジエーター・天井付けエアコンからは離れたほうが安全である。天井裏に水系の配管がないか、チェックできるとさらに良いのだが、大型複合施設は確認が難しい。

東日本大震災では、運悪く破損した配管からの漏水が床に散乱した郷土資料を濡らした館があって、訪問時には乾燥させていた。

またサーバの安全性やバックアップシステムにも注意を払うことが望ましい。

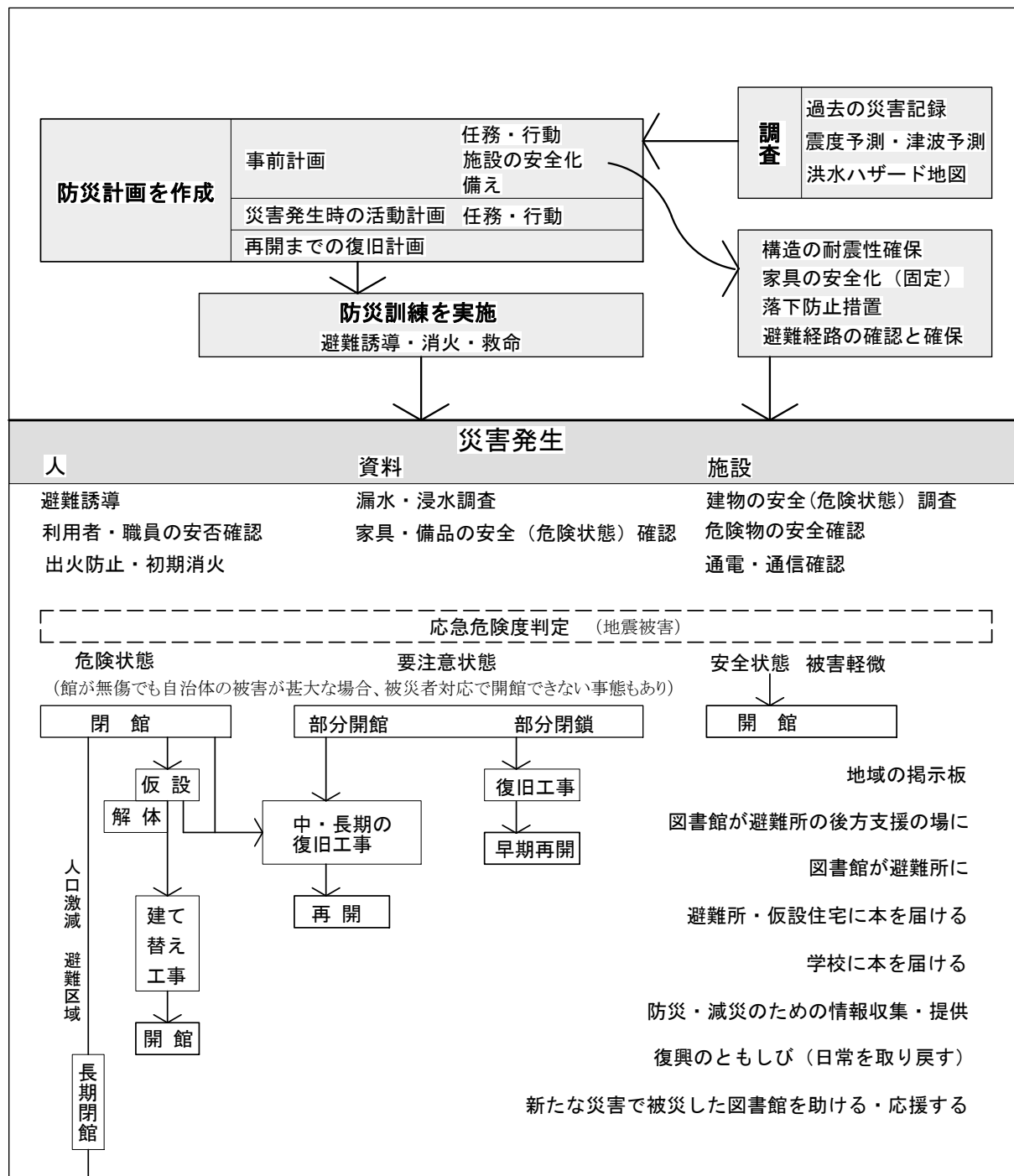
慎重かつ迅速に

泥にまみれた本は、救済できないように見えるのだが、カビが発生する前に洗浄し乾燥させるなどレスキューの方法はある。災害発生時の行動や資料の扱い、普段の備えに関するアドバイスは以下のホームページに示されているので、チェックしておいたほうがよい。

日本図書館協会の図書館災害対策委員会・資料保存委員会

国立国会図書館・東京都立図書館・歴史資料ネットワーク

自然災害に対し図書館の備え・役割・できることを考えるための材料（川島の試案）



参考図書

『みんなで考える図書館の地震対策』2012 日本図書館協会

『東松島市図書館3.11からの復興 東日本大震災と向き合う』2016 加藤孔敬 日本図書館協会